特46-810
1200500894632
特46
810

少年日露戦史 11
旅順の巻

国立国会図書館

巖谷小波編

少年日露戰史

第十一編

旅順の卷

附軍國讀本第十一

220
579

博文館發行

.46
17810

巖谷小波編

少年日露戰史

第拾壹編

旅順の卷

附軍國讀本

卷の拾壹

東京

博文館

明治
38 5 25
内交

旅順口要塞圖

凡例

一少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。

一附錄軍國讀本は、日露戰爭に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

少年日露戰史 第十一編

旅順の卷目次

口繪

●第三軍司令部●東鷄冠山北砲臺爆發●旅順の開城●敵艦隊の末路

本文

第一章 旅順の包圍……一
第二章 勸降の軍使……四
第三章 第一回總攻擊……一四
第四章 海鼠山の占領……二〇
第五章 『ステッセル』と『クロパトキン』……二六
第六章 二子山と鉢卷山……三〇
第七章 一戸砲臺の由來……三六
第八章 最後の總攻擊……四三
第九章 決死の白襷隊……四八
第十章 鳴呼二百三高地！……五三
第十一章 東鷄冠山の陷落……六三
第十二章 旅順の開城……六八

附錄 軍國讀本 卷の十一

目次

一 旅順陷落の歌……一
二 乃木攻圍軍司令官……五
三 惜哉松村將軍……一一
四 海陸の一致……一四
五 大島將軍の仁俠……一九
六 竹筒爆藥の發明……二三
七 吉田中尉の戰死……二七
八 大膽なる水雷襲擊……三一

挿畫

▲勸降の軍使……八
▲工兵の偉功……一二
▲山本少將信行戰死……二四
▲鉢卷山の占領……三四
▲一戸少將の勇戰……四〇
▲二百三高地の強襲……五六
▲敵將の窮狀……六六
▲彼我兩將の對面……七
▲海軍將校の觀測……一六
▲竹筒の爆藥……二五
▲江副少佐の剛膽……三四

第三軍司令部

乃木司令官

伊地知参謀長

鳳凰山風景より望む

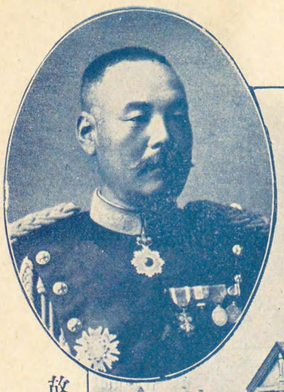
旅順要塞圖

鮫島中將

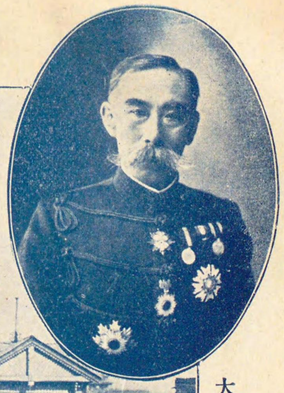
土屋中將

東鶏冠山北砲臺爆發

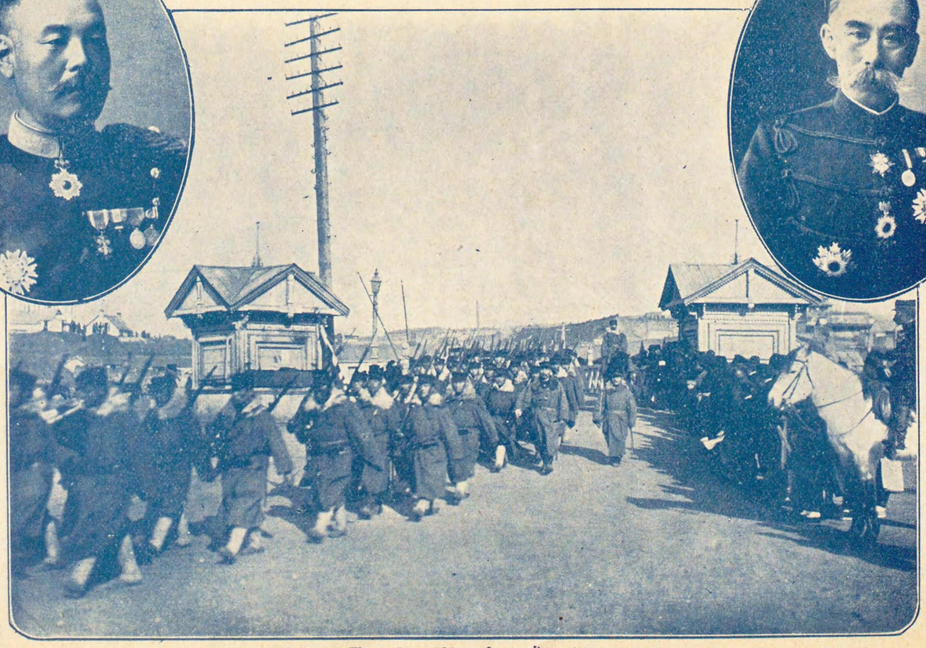
旅順の開城



故松村中將



大島中將



我の列參式城入

旅順艦隊の末路

一戸少將

中村少將

城頭山下のレトキザンとバルラダ

少年日露戰史

第十一編　旅順の卷

巖谷小波編

第一章　旅順の包圍

嗚呼旅順！　實に此の旅順の名は、我が日本國民の、十年以來、一日も忘れる事が出來ませんでした。

抑もこの旅順は、先に日清戰爭の當時、我が勇猛なる日本軍が、幾多の生命を犧牲にして、これを占領した所であります。

東洋第一の要塞

乃木大將の第三軍

背面の第一關

旅順の包圍

然るに彼の露西亞は、例の三國同盟に依て、一方我を威して、此地を清國に還へさせながら、一方清國を欺いて、まんまと自分の方に取り込み、新たに砲臺を構へ、船渠を据ゑ、莫大の金をこれに注いで、非常に嚴重な防備を整へ、東洋第一の要塞として、大いに得意で居たのであります。

されば我軍も、これを攻め落とすには、實に筆紙にも盡されぬ程の、非常な苦心をしたのでありますが、その正面からは、即ち東郷大將が、その艦隊の全力を注ぎ、また背面からは、彼の乃木大將が、第三軍の精英を以て、熱心にこれを攻め立て、開戰以來約一ケ年、遂に明治卅八年の正月、而も二日を以て、見事陷落させてしまひました。

尤も旅順攻撃の前幕は、その背面の第一關とも云ふべき、

大島中將
久直
土屋中將
光春
松村中將
務本
大迫中將
尚敏
友安少將
治延
竹内少將
正策

彼の南山の占領を以て、花々しく開かれましたが、其時專ら戰つたのは、奥大將の指揮をして居た、第二軍であつたのです。

そこで奥大將は、この南山を攻め落とすと、直ちに轡を廻らして、遼陽の方へ向ひますと、やがてこれと入り代つて、此方面を引受けたのは、驍勇無双の聞え高き、乃木大將で、これが指揮を受けた第三軍は、中將大島久直の率ひた、金澤の第九師團、同土屋光春の率ひた、丸龜の第十一師團、及び新たに中將に進んだ、松村務本の第一師團(東京)と、此三個師團で出來て居りましたが、後には大迫中將(尚敏)の第七師團(北海道)、友安少將(治延)竹内少將(正策)等の後備旅團、其他の補充隊が加はりました。

勸降の軍使

海軍の直接封鎖

勸降の軍使

此乃木軍の奥軍に代つて、初めて金州城に入りましたのは、三十七年の六月上旬でありましたが、丁度其頃海軍では、東側は貔子窩から、西側は金州灣に至るまでを、直接に封鎖してしまひましたから、是に於て旅順の要塞は、海陸兩面共に包圍され、小船一艘、馬一匹だも、容易に脱け出す事は出來なくなりました。

第二章　勸降の軍使

旅順要塞の第一關門と呼ばれた、彼の南山の險は、五月二十六日の一戰で、見事打ち破られてしまひましたが、この南山の陣地から、要塞の本防禦線までは、まだ距離もありますし、またその間には、所々に守備隊が居りますので、

八月六日

大孤山小孤山

鹽廠附近敵艦の應援

此等を順々に撃ち破り、彼地此地で幾度か小衝突の後、やがて八月に成りました。

するとその六日の事、敵は水師營の村落を、自ら焼き拂ひましたが、其所からは遠からぬ、八里莊附近の高地を初め、大孤山小孤山に據つて、防備を嚴重にして居りましたが、中にも大孤山には、砲七八門を以て、我が攻撃準備の作業を、頻りに妨げやうとしますので、何でもこれを撃ち拂へと、やがて七日の夕方から、まづ攻城砲をこれに喰はせ、其機に乘じて、我が左翼隊の土屋中將は、風雨の中を事ともせず、夜半まで突撃して、遂に陣地を半分以上奪ひましたが、敵は尚も頑固に踏み留まり、また鹽廠附近の海面には、軍艦が一隻現はれて、我が側背を砲撃しますので、

八日九日占領

我は一時進撃を中止し、更にこの軍艦に向つて、盛んに砲彈を飛ばして、遂に港内に追ひ込み、それから日の暮れるのを待つて、更に猛烈な突擊を初め、遂に八日の夜を以て、首尾好く大孤山を占領しましたが、翌九日の曉方には、小孤山をも手を入れてしまつたのです。

敵の逆襲

所が其日の午後に成りますと、敵は五六個中隊を以て、大小の兩孤山に逆襲して來ましたが、それと同時に、前面の各砲臺を初め、又もや海上に現はれた軍艦から、激しく砲擊を初めましたので、我が陣地は之が爲めに、前後から彈丸を受ける事に成つて、大いに苦戰に陷りました。かくと見た聯合艦隊は、陸地近く進み寄つて、盛んに應援をしましたので、夕方までには又敵を追拂ひ、陣地を確に占領

聯合艦隊の應援

してしまひました。

黑井中佐悌二郎

是より先、我が海軍からは、別に陸戰砲隊を組んで、黑井中佐(悌二郎)之が指揮官と爲り、その重砲の効力を現はして、大いに陸兵を助けて居りましたが、その月の初旬から、

旅順市街大火

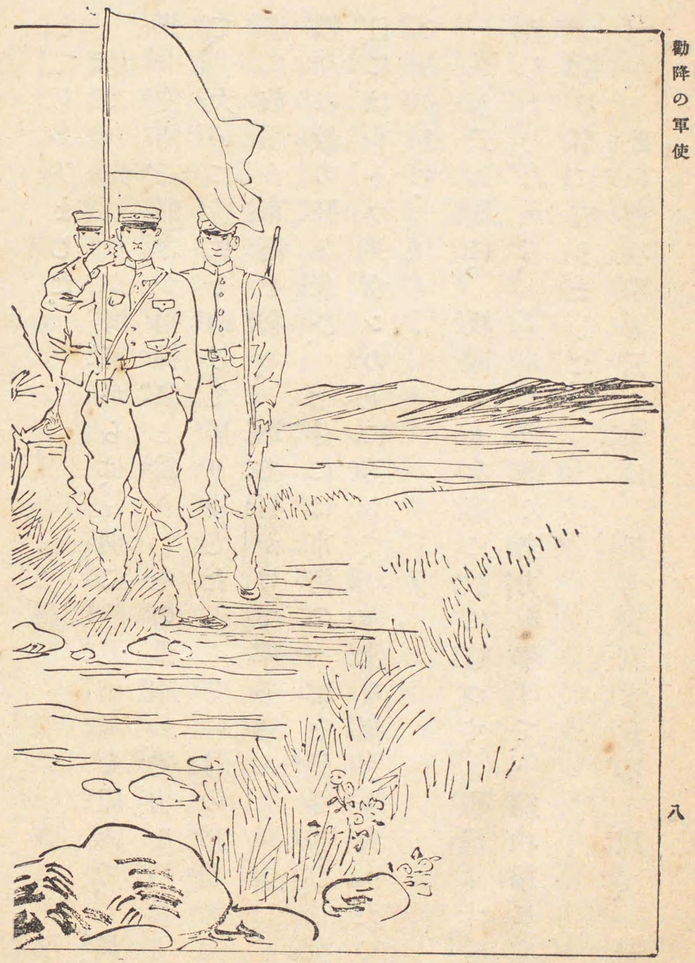
遙に旅順の市街を初め、軍港目がけて擊ち込んだ彈丸は、頻りに敵の肝を奪ひ、七月には市街の一部を燒き拂ひ、九日にはレトウ井ザンの上に落ちて、非常な損害を與へたのであります。

レトウヰザンに命中

かう云ふ風に、攻圍軍も次第に敵に迫つて、戰機も十分熟しましたから、是からは彌々全力を擧げて、總攻擊に取り掛る事に成りました。

が、此の總攻擊と云ふ事は、最も鋭利な武器を以て、最

勸降の軍使



勸降の軍使

第二章

大元帥陛下の御仁慈

非戰鬪員を助けよ

八月十六日

も猛烈に攻めるのですから、隨つて旅順の市街を荒らし、住民を損ふ事も、非常な殘酷な有樣を來たします。是れ勢ひ止む得ぬ事でありますが、苟も人情のある者には、決して忍びない所であります。

されば こそ、仁德を備へ、慈悲に富ませ給ふ、わが大元帥陛下は、山縣參謀總長を以つて、大山滿洲軍總司令官まで、難有い御思召をお傳へに成りました。その御思召によりますと、我が大元帥陛下には、旅順口要塞内に居る、戰鬪に與からぬ者共を、成るべく無事に助けて遣はす樣にと云ふ事です。

大山總司令官は、その御思召を承ると、直にこれを乃木司令官に傳へましたから、乃木司令官は、即ち八月十六日

軍使山岡砲兵少佐

水師營北五百米突

を以て、參謀山岡砲兵少佐を軍使とし、敵の主將ステツセルへ宛てゝ、この御思召を傳へ、又降伏勸告の書を送りました。降伏勸告とは、此上互ひに戰つても、徒らに人を傷ける斗りで、何の役にも立たぬでは無いか。それよりは、どうせ負ける者だから、今の中に素直に降伏して、城を開け渡してしまつた方が、其方の爲めにも利益では無いかと、かう云つて說き勸めたのであります。

其所で山岡少佐は、十六日の午前十時半、水師營の北五百米突の、敵の前哨の所へ來て、我が大元帥陛下の思召書、及び乃木司令官の降伏勸告書を、敵の要塞參謀長に渡し、滿二十四時間の中に、必ず返事をする樣に約束して、一旦司令部へ引揚げました。

工兵の偉功

勸降の軍使

第二章

敵の謝絶

第一回總攻撃

八月十九日

所が、翌十七日の午前十時、今度は敵から軍使が來て、昨日の返事を持つて來ましたが、非戰鬪員を助けて遣るから、豫め他へ逃がす樣にと云ふ、難有い陛下の御思召も、又今の間に降伏しろと云ふ、乃木大將の親切な勸告も、共に御斷り申すと云ふ事です。

事茲に及んでは、もはや用捨は入りません。是に於て乃木司令官は、全軍に指揮を傳へて、いよ〳〵總攻撃に取り掛りました。

第三章　第一回總攻撃

時は八月十九日、旅順要塞總攻撃の、第一回は遂に開かれました。

左翼第十一師團
左翼第九師團

中央第一師團

鳳凰山

盤龍山舊砲臺

その陣立はと云ひますと、土屋中將の第十一師團は、左翼隊として大孤山より、松村中將の第一師團は、左翼隊として、百七十四米突の無名山より、また大島中將の第九師團は、中央隊としてそれに聯り、八里庄五家旁の北より、それ〴〵攻撃に掛りましたが、軍司令官乃木大將は、參謀長伊知地幸介、その他の幕僚と共に、鳳凰山東南の高地に在つて、全軍の指揮を執つたのであります。

そこでまづ最初には、中央隊の右翼を以て、クロバトキン砲臺に、強く襲撃を試みましたが、元より堅固な建築の上に、守兵もよく守りましたから、容易にこれを奪ふ事が出來ません。

次いで二十日の夜、中央隊は盤龍山東舊砲臺、左翼隊は

東鶏冠山北砲臺
電氣鐵條網
決死隊

第一回總攻撃

東鶏冠山北砲臺に向つて、その前に敵の敷設した、鐵條網をまづ破りに掛りました。

然るにその鐵條網は、今まで南山などに在つたのとは異つて、その鐵條に電氣が掛けてありますから、一寸でもこれに觸れると、直ぐに動けなく成つてしまふと云ふ、恐ろしい危險な物ですから、これを破ると云ふ事も、亦非常な苦心であつたのです。

けれども勇敢なる我が工兵隊は、例の決死隊を組織して、漸くこれを爆發させますと、その機に乘じて歩兵隊は、勢鋭く突貫して、一擧に砲臺を乘取らうとしました。

するとまた砲臺からは、さも待ち構へて居る樣に、機關砲の火蓋を切つて、どつと火の雨を浴びせかけましたので、

三里橋西北高地
太平溝東南高地
ステツセル砲臺
海鼠山

殘念ながらこの爲めに、斃される者數を知らず、見る〳〵中に砲臺の下は、味方の死骸で山が出來た位です。

それを又事ともせず、躍り越え踏み越えて、左翼隊の一部の如きは、東鶏冠山の北砲臺の、東南凡二百米突程に在る、中間堡壘を奪ひましたが、さうなるとまた砲臺から、猛烈な砲擊を受けますので、折角取つたこの陣地も、亦棄てなければ成りませんでした。

尤も右翼隊の方面では、三里橋西北の高地、及び太平溝東南の高地まで、進んでこれを占領し、尙頑强に守つて居る、水師營南方のステツセル砲臺、並に寺兒溝西北の、海鼠山の敵兵と、睨み合つて構へる事に成りました。これは二十一日までの事です。

第一回總攻撃

明くれば二十二日の午前、中央隊の小部隊は、工兵隊の力を借りて、首尾よく砲臺の一部を碎き、盤龍山に乗り込みましたが、猶その副廓には、敵兵が殘つて居りまして、

爆藥合戰

石を投げ爆藥を打ちつけ、死物狂に防ぎますから、これを相手に戰つて居りますと、今度はその隣にある、盤龍山西舊砲臺から、我が側面を射撃しますので、大いに苦戰に成りましたが、その日の夕方、大島中將の中央隊から、豫備隊中の屈竟の勇士が、二個中隊程猛襲して、一擧に西舊砲臺を取つてしまひました。

盤龍山西舊砲臺占領

時に土屋中將の左翼隊は、此日の正午を以て、東鷄冠山北砲臺を、突撃する心算でありましたが、軍司令官は、却つてこれを止め、その代り中央隊の占領した、東舊砲臺を

望臺攻撃

通り越して、望臺及びその西北の高地へ、突撃を試みよと命じました。

で、二十三日には、夕方から運動を始め、左翼中央の兩隊は、盤龍山東舊砲臺を通つて、其近所の敵壘に突撃し、その夜半過ぐる頃、望臺の西北の高地を、一度に攻め取らうとしましたが、敵は例の機關砲を以て、激しくこれを射撃しますので、辛くも山の麓に隱れて、彈丸を除ければ成らぬ事に成つたのです。

さて右翼隊の方面を見ますと、是は海鼠山の敵と相對したまゝ、まだこれを占領するに至りません。第一回總攻撃の戰況は、斯の如くの有樣で、我兵は非常に傷みましたが、其割に敵を破る事は、まだ殘念ながら出來ませんでした。

海鼠山の占領

最新式

最堅牢

第四章　海鼠山の占領

一體旅順の要塞は、初は清國で設けたのでありますが、その砲臺の如きは、十年前の戰爭の時、神勇なる我が日本兵の前には、僅か一日より支へ得ませんでした。

然るに露國でこれを借り受けて、新たに經營してからと云ふものは、その建築に莫大の費用を掛け、世界で最も新しい式により、最も堅固に造り上げたものですから、これを攻め落すと云ふ事は、先に清國を相手にしたのと、迚も同日の論には成りません。

されば第一回の總攻撃に、我は砲兵と歩兵の力を用ひ、大方は例の突貫の勢で、砲臺占領を企てましたが、その結

正攻法

稻妻形の攻路

果は思ふ樣で無く、却つて兵を損じる斗りですから、そこで一旦戰鬪を中止し、第二回の總攻撃には、更に正攻法に依る事に成りました。

正攻法とは、まづ工兵の手を以て、敵の砲臺の根まで、稻妻形の路を掘り、この路を傳はつて、敵の足本まで迫つた所で、爆烈藥で砲臺を碎き、其所から初めて歩兵隊が、一度に突貫すると云ふので、要塞を攻撃するのには、是が正式の戰術でありますから、即ち正攻法と云ふのであります。

またその路を、何故稻妻形に掘るかと云ひますと、これは敵の眼を避け、また彈を防ける爲めなので。これを眞直に掘つて行けば、距離は近く、手數も省ける代りに、忽ち

クロパトキン砲臺

九月十九日

二百三高地

海鼠山の占領

敵の射撃をうけて、とても進む事は出來ないのです。

で、我攻圍軍は、この正攻法を取る事に成りますと、各方面の工兵隊は、夜を日に次いで路を掘り、凡そ四週間斗りの間に、クロパトキン砲臺へ五六十米突、ステツセル砲臺へは、百米突の所までは、漸く出來上りましたから、そこで九月十九日には、第二回の總攻擊に着手しました。

此時松村隊は、例の海鼠山を初め、その傍に聳えて居る、二百三高地に向ひ、大島隊は直ちにクロパトキン砲臺を突き、又土屋隊は、之が豫備に廻つて、牽制の運動を取る事に成つたのです。

中にも松村隊は、まづその兵を三手に分け、右翼は二百三高地に、中央は海鼠山に、左翼はステツセル砲臺にと、

旅順内部の觀望

三方から攻め掛りましたが、敵は堅固な砲臺に據つて、頑強に防ぎ戰ひますので、容易に拔く事が出來ません。

其中に中央部隊は、猛烈に攻擊して、海鼠山の東の端の、散兵壕を漸く略取しましたが、日は既に暮れましたから、次の二十日には、朝からまた激しく攻め立て、遂にその夕方に及んで、この砲臺を占領してしまひました。

然るにこの海鼠山は、其頂上に立つと、旅順口の内部が、大方眼の下に見られるので、我が攻圍軍の戰略上、此砲臺の占領は、非常な利益であつたのです。

この海鼠山の占領は、少將山本信行の部隊でありましたが、さればその勳功は、攻圍軍の中にも最も大なるものでありましたが、其後二十四日の事です、少將は一人の通譯官を

第四章

山本少將信行戰死

海鼠山の占領

ステツセルとクロパトキン

隨ひ、自らこの山上に登つて、敵の樣子を視察して居ります所へ、何所から來たか敵の彈が、宙を切つて飛んで來て、アハヤと云ふ間に少將の胸を、忽ち射貫いてしまひましたから、流石の勇將もその塲に斃れて、遂に戰死を遂げましたのは、一實に殘念な事であります。

ステツセルとクロパトキン

ステツセル砲臺

第五章　『ステツセル』と『クロパトキン』

茲にまた、ステツセル砲臺に向つた、松村隊の左翼部隊は、十九日の夕方を以て、敵の散兵壕まで突進しましたが、猛烈な機關砲の射擊を受けて、一隊の將卒殆んど全滅し、遂に目的を達する事が出來ません。

そこで二十日の曉方には、まづ激しく砲擊を食はせ、敵

山上の魚形水雷

クロパトキン砲臺

龍眼

水源地

のやゝ痿む所を、すかさず突貫して行つて、遂に第一壘を拔き、續いて正午頃までには、第三壘まで乘取つて、所謂ゐるステツセル砲臺を、全く占領してしまひました。

所が此時可笑しかつたのは、敵の逃げて行つた後に、魚形水雷のあつた事です。魚形水雷とは、元より海で使ふべきものです。それを山上に持ち揚げて、陸戰の防備に使はうとは、何と窮した話ではありませんか。

ステツセル砲臺に次いで、我軍の手に落ちたものは、クロパトキン砲臺であります。

是は龍眼の北方にある角面堡で、旅順の命脈とも云ふべき、龍眼の水源地保護の爲め、敵帥クロパトキンが、特に此地に築かせたものであります。

三原大佐の死
特別爆裂彈隊

ステツセルとクロパトキン

その高さは、僅か六十一米突に過ぎませんが、結構の堅固に、防備の嚴重な事は、他に類の少い位であります。さればこの方面に向つた、大島中將の中央隊では、先に第一回の總攻撃の時、力を盡して而も拔く事出來ず、却つて部隊長三原大佐を、その犧牲として失つた位ですから、今度の攻撃には、前以て十分に用意を整へ、手投爆烈彈を持つて居る、特別隊を組織して、砲兵歩兵の攻撃の間に、機を見て躍り込む手筈にしておきました。

で、十九日もはや暮れる頃、東郷少佐は一部隊を率ひて、驀地に外壕まで突入しますと、例の爆烈彈隊は、手に〳〵爆烈彈を持つて、此所から亂れ入りましたが、敵も去る者、同じく爆發藥を投げ出し、また機關砲を打ち出して、大い

工兵隊の偉功
眼鏡山
本郷、小野兩大隊

に我兵を惱まし、其爲めに一旦は、退却せねば成らぬ樣に成りました。

實に此時の戰鬪には、工兵隊が最も働いたので。その力で地雷火の途も切れば、また堡壘の一部を破り、用意して行つた土嚢を以つて、敵の通路を塞ぎなどして、大いに歩兵の突撃を助けたのです。

此夜また伊藤小隊は、水師營の東の方、眼鏡山の前から進んで、まづ散兵壕を爆發させ、翌二十日の朝に成るまで、激しく戰ひましたから、本郷、小野の兩大隊も、これと共に力を合はせて、猛烈に攻撃し、遂に敵を追ひ拂つて、此砲臺を占領しましたのは、午前六時半頃でありました。

かくしてステツセル砲臺も、亦クロパトキン砲臺も、共

死傷者
右翼隊三千四百四人
中央隊千五十人

二子山と鉢巻山

に我手に落ちてしまひました。之が爲めに我兵の損じた事も、亦決して少くは無いので、即ち此時の戰鬪だけで、右翼隊に三千四百四人、中央隊に千五十人の死傷を出しました。

けれども又考へて見れば、ステツセルと云ひクロパトキンと云ひ、共に敵には大切な主將の名です。その主將の名の付いた砲臺を、二つ共奪ひ取つたと云ふのは、何と愉快な吉兆ではありませんか。

第六章　二子山と鉢巻山

海鼠山、ステツセル砲臺を得た、我が松村將軍の右翼は、今や旅順口を眼下に見ながら、直ちに松樹山砲臺と相對し、

二龍山

左翼の二子山攻撃

西山聯隊長

又クロパトキン砲臺を得た、大島將軍の中央隊は、見事に旅順の水源を奪つて、二龍山の敵と睨み合ふ事に成りました。

茲に左翼の土屋隊は、先の二砲臺の攻撃には、少しも與かりませんでしたが、今や猛烈に運動を初めて、鹽廠の南に聳えて居る、二子山の敵に向つて、やがて襲撃を試みたのであります。

一體この二子山には、大きな砲が備へてあつて、動もすれば我が頭の上へ、猛火を浴びせかけますから、何しても此敵を破つて、陣地を此方へ奪はねば成りません。

そこで機の熟するを待ち、これが攻撃にかゝりましたのは、十月四日の事でありましたが、此時聯隊長西山保之は、

野口大尉
大谷中尉、
小笠原、
越智兩少尉

奇襲隊の三別

第一高地
第二高地

二子山と鉢巻山

攻撃に先つて奇襲隊を募り、野口大尉(矩)大谷中尉(清水)小笠原(於菟彦)越智(林藏)の兩少尉に之が指揮を委ね、小孤山の西南の麓から、夜に紛れて襲撃に掛らせました。

尤もこの奇襲隊は、攻撃隊、砲臺破壞隊、及び牽制隊の三つに別れて、攻撃隊はまづ鹽廠附近に向ひ、他の二隊は海岸から、故らに敵と詐つて、第二高地に迫る風を見せ、其間も攻撃隊は、第一高地に向つたのであります。

戰鬪は夜半から初まつて、而も激烈を極め、其爲めに越智、小笠原の兩少尉も、戰死を遂げてしまひましたが、『一人でも殘る間は、一歩も退く事成らん』と云ふ、西山大佐の號令に、士氣は大いに奮ひまして、翌五日には二子山も、我軍の占領する所と成りました。

十月十六日

大鐵道橋

奇襲隊の功を奏して、二子山は忽ち我が手に歸しましたが、猶我中央隊の前面には、盤龍山西舊砲臺の西南に、鉢巻山と云ふものがあります。

これも二子山と同じく、其山の形に依て、新たに我軍の付けた名でありますが、中央隊のこれが攻撃に着手したのは、十月十六日の事でありました。

然るに此所を守つて居る兵は、敵ながらも天晴勇猛の士で、鬼神を欺く我が激烈な襲撃に、よく防戰力鬪しまして、容易に此所を明け渡さず、前後四五回の突撃の後、遂に支へきれなく成つて、後の方へ退きましたが、我軍は此の一戰で、鉢巻山は云ふに及ばず、二龍山の中腹から、大鐵道橋に亘る一帶の地を、悉く占領してしまひましたから、此

鉢巻山の占領

二子山と鉢巻山

第三回總攻撃
一戸砲臺の由來
P砲臺
Q砲臺

一戸砲臺の由來

に依て作戰の便利を得た事も、決して少くはありませんでした。

斯くの如く、第二回の總攻撃は、第一回の時に比して、大いに成績が好かつたのであります。

されば第三回の總攻撃は、間も無く十月二十六日に初まりました。

第七章　一戸砲臺の由來

第三回總攻撃の部署は、軍司令官に依て定められました。

その命令によりますと、右翼隊は松樹山に、中央隊は二龍山及P砲臺に、左翼隊は東鶏冠山北砲臺及Q砲臺にと、それ〴〵攻撃を初める事に成つたのです。

攻路の爆烈

是より先、東鶏冠山北砲臺に對する攻路は、十月二十三日を以て、大方出來上りましたが、今五十米突で、砲臺の根まで達すると云ふ所で、敵の妨害が激しくなり、思ふ樣に仕事が出來ませんから、今度は地の下に坑を掘り、左翼隊は此所から進み寄る事にしました。

するとまた敵からも、地中を掘つてこれを迎へ、二十六日の夜半頃、爆烈藥をこれに仕掛けて、何も知らずに働いて居る、我が工兵の勇士を、無殘にも撃ち殺しました。

けれどもその爆發の爲めに、大きな穴が出來ましたから、我軍は忽ちこれを利用し、此所から猛烈に突撃して、遂に占領してしまひましたのは、寧ろ天佑であつたのです。

また中央隊は、攻撃に掛るが早いか、僅か十分間を以て、

敵の逆襲

二十七、九日

三十日

一戸砲臺の由來

二龍山前面の散兵壕を乘取りますと、敵はこれを取り返さうと思つて、二十七日と二十九日とに、二度まで逆襲して來ましたが、難無くこれを追ひ拂つて、決して再びは還へしませんでした。

そこで今度は、盤龍山東舊砲臺と、東鷄冠山北砲臺との間にある、P砲臺を擊つ事に成つたのです。

一體P砲臺とは、眞個の名ではありませんが、兼ねて築かれて居る砲臺の他に、今度の戰爭が開かれてから、新たに設けられた砲壘も、亦澤山ありまして、その名が一向解りませんから、それで假に我軍では、A、B、Cの順序に依て、これを呼んで居たのであります。

で、このP砲臺の攻擊は、三十日の午後一時と極まりま

三面砲擊

敵の決死隊

した。それは例の攻路の工事が、十九日から着手して、二十九日の夕方には、砲臺の下一百米突の所まで、すつかり出來上つて居たからであります。

いよ〳〵突擊と云ふ前には、例の通り工兵の手で、鐵條網を破り、壘壁を破りまして、此所からドツと躍り込みました。

その勢の激しさに、敵は二十分程支へた斗りで、我手に明け渡してしまひましたが、一旦痿んで見えた敵は、兼ねて示し合はせたものと見えて、我兵の砲臺に入つた所を、西は望臺、東は鷄冠山、南は舊圍壁の三面から、一度に砲擊を初めまして、我が頭上に彈丸を降らせ、これに惱まされて居る所へ、やがて決死隊とも思はれる部隊が、手に手

一戸少將の勇戰

一戸砲臺の中來

第七章

一戸少將の憤慨

一戸砲臺の由來

に爆烈彈を投げながら、猛烈に逆襲して來ますから、此方も一生懸命に戰つて、幾度かこれを斥けましたが、夜の十時半頃には、更に兵數を增して押し寄せましたので、今や味方も防ぐに途無く、遂に奪ひ還されてしまつたのです。

此時部隊長一戸少將(兵衛)は、此の味方の不利を聞いて、切齒して口惜しがり、軍刀ヒラリと拔くが早いか、眞先に立つて部下を勵まし、自ら敵兵三四人を斬つて、阿修羅の如く荒れ廻りましたから、これを見た部下の將卒は、頓に勇氣百倍し、一度は棄てやうとした砲臺へ、また激しく突擊しましたので、流石の强敵も度を失ひ、三十一日の夜の明けきらぬ間に、又もや亂れ立つて逃げ出だし、もはや二度と逆襲して來ません。

P砲臺の改名

最後の總攻擊

かくしてP砲臺は、一旦奪ひ還へされましたが、一戸少將の非凡の働きで、見事にまた取り戻しましたから、是より一軍感嘆して、その無名のP砲臺を、一戸砲臺と云ふ事に成りました。

第八章　最後の總攻擊

我軍が正攻法を取つてからは、旅順包圍の作戰も、着々歩を進めて來ましたが、何を云ふにも此の要塞には、敵が有り丈の手段を盡し、出來る丈の力を注いで、必死と守つて居りますから、勇猛無比の日本軍を以てしても、これを碎き破るのは、なかなか骨が折れるのであります。

で、思ひの他時間を費やし、旅順の市街はつひ鼻の先に

最後の總攻撃

バルチツク艦隊の來航

見えながら、そこまでには頑強な砲臺が、まだ澤山ありますので、全く旅順を陷落させる事は、急に出來さうにも無いのです。

然るに敵は、先に旅順の艦隊を破られ、浦鹽艦隊を傷けられましたので、新たにバルチツク艦隊を繰り出し、それがはや途中まで來て居て、遠からず押し寄せて來る樣子ですから、わが海軍に於ても、またその用意をしなければ成りません。

それにその旅順が、まだ陷落しない樣では、海軍は例の封鎖を解く事が出來ない樣では、封鎖を解く事が出來ず、隨つてバルチツク艦隊に對する手配りも、十分に出來ない事に成りますから、東郷司令長官は、殊の外心を痛め、乃木大將に意を傳へましたので、今は陸軍も猶豫せず、最後の大英斷を以て、大攻擊を行ふ事に成りますと、元より軍事に精通したまふ、我が大元帥陛下にも、大いに此事を嘉みし給ひ、即ち十一月二十二日を以て、乃木第三軍司令官へ、畏くも勅語を賜はりました。それは

十一月二十二日の勅語

『旅順要塞ハ敵ガ天險ニ加工シテ金湯トナシタル所ナリ。其攻略容易ナラザル、固ヨリ怪ムニ足ラズ。朕深ク爾等ノ勞苦ヲ察シ、日夜軫念ニ堪エズ。然レドモ今ヤ陸海兩軍ノ狀況ハ、旅順攻略ノ機ヲ緩ウスルヲ得ザルモノアリ。此時ニ當リ、第三軍總攻擊ノ擧アルヲ聞キ、其時機ヲ得タルヲ喜ビ、成功ヲ望ム情甚ダ切ナリ。爾等將卒夫レ自愛努力セヨ。』

金湯は金城湯池の略、共に堅固な城の事

二十六日第四回總攻撃

と云ふ難有い御言葉でありましたから、乃木大將も大いに奮ひ起ち、『將卒一般深く聖旨ヲ奉體シ、誓ツテ速ニ軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス』と、謹んで奉答し、茲に又戰畧を講じて、いよ〳〵二十六日から、最後の第四回總攻撃を開始し、何でも旅順を落さぬ間は、骨に成つても此地を去るまいと云ふ、非常な決心を固めました。

此時我軍の眼前には、松樹山、東鶏冠山、二龍山、望臺二百三高地などの、最も堅固な砲臺が、立ち閉がつて居りますから、我軍はまづ之に向つて、強襲を試みなければ成りません。

即ち右翼隊の左翼は松樹山、中央隊は二龍山、左翼隊は東鶏冠山と、それ〴〵別れて進みましたが、此時右翼の他

鳩灣方面の牽制運動

の部隊は、皆牽制の任に當つたのです。

されば右翼隊の松村中將は、最右翼の聯隊を以て、鳩灣附近の高地に向ひ、わざと猛烈に攻撃させましたから、之が爲めに敵の豫備は、急いで此方面に集まり、防備を嚴重にしましたので、我が牽制の目的は、首尾好く達せられる事に成りました。

そこで二十六日には、曉方から砲撃を初め、やがて午後の一時を合圖に、各方面とも運動を起し、矢庭に敵の塹壕に突入して、猛烈な襲撃を初めたのです。

雨霰と降る機關砲彈の下を、死骸を踏み越え、乘り越えながら、無二無三に突撃して、まづ要塞の胸壁に取り着き、それを攀ぢて乘り込めば、中にも防禦が嚴重に出來て居て、

決死の白襷隊

而も要所々々には、機關砲やら地雷火やらを備へて、わが突入を防ぎますから、流石勇猛の我兵も、全部を占領する事出來ず、只砲臺の一小部分を奪つて、敵と互ひに顔を見合はせ、手も届く斗りの所に、また對陣せねば成らぬ事に成りました。

敵と相接して對陣

第九章　決死の白襷隊

決死の白襷隊

少將中村覺の指揮を受けて、特別豫備隊として設けられた、一個の獨立隊がありました。

特選の獨立隊

茲にこの第三軍の中に、少將中村覺の指揮を受けて、特別豫備隊として設けられた、一個の獨立隊がありました。

是は右翼、中央の兩隊から、特に選拔された屈指の勇兵でありますが、第四回の總攻撃の急先鋒として、驀地に敵陣へ突撃し、旅順の要塞を中斷すると云ふ、非常な大任を

決死隊中の決死隊

帶びまして、決死隊中の決死隊と成り、何れも非常な覺悟を以て、いよ〳〵突撃する事に成つたのです。

さればその扮裝の如きも、わざと普通の軍服を用ひず、メリヤスの防寒襯衣の上に、白布の襷十字に綾どり、何れも生きては還らぬ覺悟で、勇み立つて進みましたが、恰もその出發の際、乃木大將は其前に出て、一場の演說をしました。

乃木大將の演說

『今日は如何なる場合であるか。陸には敵兵の大增加あり、海にはバルチツク艦隊の來航あり、此時に當つて、我が攻圍軍の成功と失敗とは、即ち國家の安危に關する。實に大切な場合であるぞ。諸君は今決死の覺悟を以て、敢へて突撃の壯擧を行ふ。實に本官も感奮する所ぢや。嗚呼、諸君

中村少將の訓令

が一死君國に酬ゆるの時機は、實に今日の他は無い。何卒確乎賴むぞ！』

と、如何にも思入つて陳べますと、隊長中村少將も、同じく部下を警めて、

『我が獨立隊の目的は、敵の要塞地を中斷するにあるのぢや。一人たりとも生還する心では成らん。若し吾輩が死んだら、渡邊大佐が之に代る。渡邊大佐が倒れたら、大久保中佐が代るのぢや。其他も皆この通り、順次に代る者を定めて置け！襲撃は銃劍突撃が主ぢや。第一着の地歩を占める迄は、たとひ敵の猛射は受けても、一發も應射する事は成らんぞ。故無く後方に止まるか、漫りに隊伍を離れるか、又は退却するものは、皆隊長が斬つて棄てる。』

獨立隊の目的

松樹山攻撃

地雷火と爆烈彈

と、嚴かに云ひ渡しましたので、之を聞いた全隊の將士は、肉躍り骨鳴るまで、皆奮ひ立たずには居られませんでした。

で、一旦は休養して英氣を養ひ、やがて午後八時頃、この白襷の決死隊は、月の光を莱にして、松樹山砲臺にと向ひました。

元より命を的にした、鬼神も恐れぬ決死隊は、砲火の下を事ともせず、やがて松樹山補備砲臺に迫まり、その塹壕を距つこと僅か二十米突の地點まで來ますと、敵はまづ地雷火を爆發させ、それにも痿まず壘下まで達しますと、今度は爆裂彈を投げつけますので、此爲めに我が損害は、忽ち非常な數に上りました。

決死の白襷隊

けれども士卒は事ともせず、猶も進んで突撃すれば。今度は又機關砲を以て、側面からも背面からも、隙間無く彈丸を浴びせ、鏖殺にしやうと云ふ意氣組です。

鏖殺！　元より決死隊と云ふからは、鏖殺は決して恐れません。が、それも時と場合に依るので。これが最初からの目的を、十分達してからの事ならば、命は決して惜くはありません。然るに今は其目的の未だ半分も達せられないのに、此所で鏖殺に會つては、全く犬死に成て終ひませう。

と、見て取つた軍司令官は、元より大切なこの勇士を、犬死させては成らぬと云ふので、急ぎ傳令を發しまして、この決死の白襷隊に、一トまづ引揚げを命じました。

引揚の命

隊長中村少將の無念さ！　實に此時少將は、男泣きに泣いたのであります。

尤も此晩は、只にこの隊斗りでなく、本攻撃隊に於ても、宵から猛烈に戰つて、この決死隊に應援しましたが、何分敵の砲臺が堅牢に、防戰が頑强であつたので、折角の計畫も仇と成り、而も隊長中村少將まで、その膝頭に彈丸を受けて、重傷をさへ受けました。何と殘念な事ではありませんか。

中村少將負傷

第十章　嗚呼二百三高地！

嗚呼二百三高地

抑も旅順と云ふ所は、一方海に面し、三方山を帶びた、天然の要害でありますが、之の背面を包んで居る山の中に、二百三高地と云ふのがあります。

高二百三米突
旅順富士
鐵血山

松村將軍の命名

旅順の天王山

鳴呼二百三高地

二百三高地とは、高さが二百三米突あるので、我軍の假に斯う名づけたのでありますが、或はこれを旅順富士と云ひ、または鐵血山とも呼びました。

旅順富士とは、その山が此邊で一番高い故でありますが、これを更に鐵血山とは、實に松村將軍の命名なので、これは我が幾千の同胞の、鐵と血とで購ひ得たと云ふ、壯烈な歴史がある故であります。

一體この山は、其位地と云ひ、高さと云ひ、旅順口の内部を見渡すのには、一番好い所でありますから、これを此方に奪つてさへしまへば、敵の運命はもう極まるので、云はば彼の山崎合戰の、天王山と云ふべき所です。

されば松村將軍は、先に九月の十九日から、四日間も此

十一月二十七日

赤坂山

友安、馬場兩少將

所に突擊して、多數の兵を犧牲にしましたが、遂に拔く事が出來ません。

そこで今度は、更に新手の兵を加へて、十一月廿七日から、是非とも占領する意氣組で、強硬に襲擊を試みたのであります。

で、まづ砲兵隊からは、盛んに砲彈を食らはせ、その砲彈の一々破裂して、烟は山上を包む頃、兼ねて號令を待つて居た突擊隊は、ドツと斗りに鬨を造つて、一度に山上に攻め登りましたが、この高地と海鼠山との間に、赤坂山と云ふのがあつて、共に敵の要害ですから、それへも同じく突擊しました。

西と南の側面よりは、友安少將の部隊が向ひ、又西北の

二百三高地の强襲

嗚呼二百三高地

第十章

馬塲少將
太陽溝
鴨湖嘴
老鐵山
大迫將軍

側面は、馬塲少將(命英)引受けて、共に此間から丹精を凝らし、漸く掘り上げた攻路を傳はり、やがて砲臺の麓まで進んで、更に鐵條網を切斷し、鹿柴を破壞して、尙も驀地に攻め入らうとしますと、今度は例の機關砲を以て、隙間も無く擊ち初め、それと同時に、太陽溝、鴨湖嘴、及老鐵山の諸砲臺から、盛んに砲彈を飛ばして來て、我兵の頭上から浴びせかけますので、さしも勇氣に充ちた我が諸隊も、さながら蟻の群の上に、熱湯でも振りかけられた樣に、バタリ〳〵と算を亂だして、倒れる者引きも切らず、爲めに全滅した中隊は、何程あつたか知れない位でした。

此通りの有樣で、廿七日の襲擊は、何の功も無く中止と成り、次いで廿八日には、第七師團の大迫將軍も、新たに

香月中佐
村上大佐

部下を率ひて、攻擊部隊に加はりましたが、まだ敵は動く色もありません。

偶々一方を突き破つて、山の頂に達したと思へば、忽ち他の砲臺から、十字の如く鐵火と降らされるので、再び棄てゝ歸へらねば成らず。友安、馬塲の兩少將も、自ら戰線に現はれて、頻りに士卒を勵ましましたが、矢張り其の効は無く、味方は徒らに傷つく斗りで、此日も暮れてしまひました。

そこで二十九日にも、非常の苦戰をやつた揚句、三十日の夜に至りまして、友安部隊の香月中佐は、村上大佐と相應じて、最も猛烈なる襲擊を行ひ、遂にこの險要の地を、辛くも占領しましたのは、午後十時でありましたが、隣の

鳴呼二百三高地

聯隊の生存僅四十餘名

占領後又奪還さる

赤坂山の如きは、奪ひ取つては奪ひ還され、難戰苦鬪を極めながら、又乘取るに至りません。

すると、其夜も更けまして、十二月一日の午前一時三十分頃、敵の增援兵六百斗りは、左手に銃を持ち、右に爆藥を提げながら、頗る鋭く逆襲に來まして、忽ち大激戰と成り、新たに加つた齋藤少將の一隊も、力を協せて防ぎましたが、其間に村上大佐の隊は、幹部大方全滅して、夜の明ける頃までには、僅か四十人に成つてしまつた位です。

かう云ふ風で、味方は後方部との連絡を失ひ、擊つに彈丸無く、飲むに水無く、非常な苦境に陷りましたから、友安少將は殘念ながら、此所を棄てゝ退却しました。

何分連日の激戰に、彼我の死傷夥しく、屍は全く山

一時休戰

十二月五日

齋藤少將吉田少將

腹を掩うて、慘憺たる有樣と成りましたから、其所で互ひに相談して、戰鬪を一時中止し、死體の收容と隊伍の整理とに、空しく三日を費しましたが、其間に英氣も養はれましたから、やがて十二月五日には、再び突擊が初まつたのです。

但し此時は、齋藤少將(太郎)友安少將に代り、吉田少將(清一)と兩手に別れ、新來の精兵を以て奮擊突戰しましたが、敵も流石に此間から、非常に疲れて居りますので、この大切な地を、おめ〳〵我軍に明け放して、遂に後方へと逃げ込みました。

嗚呼二百三高地！ 實にこの要地を奪ふには、前に四日、後に十日を費やして、初めて我手に入りました。が、この

東鷄冠山の陷落

爲めに我が同胞の、血を流し、骨を曝したことは、實に何千とも知れません。名づけてこれを鐵血山と云ふのも、元より當然の事であります。

第十一章　東鷄冠山の陷落

東鷄冠山の陷落

重砲隊間接射擊

白玉山

旅順の天王山二百三高地は、斯くして我が手に落ちました。攻圍軍の成功も、今は決して困難ではありません。一体今までは、旅順の軍港内に向つて、重砲隊の間接射擊を行つて居たのですが、その照準を極めるには、彼の海鼠山に望樓を設け、其所で觀測して居りました。所が軍港の手前には。白玉山と云ふ小山があつて、その陰に成つて居る所は、何うしてもよく解りません。

命中彈二百四十八發

敵艦の全滅

ゼバストポリーの脫出

然るに二百三高地を取つて、此所に觀測所を移してからは、何の邪魔に成る物も無く、港内が手に取る樣に解りますので、重砲の照準は、此所で全く正確なものと成り、丸で袋の物を叩く樣に、ドーン〳〵と擊ちます程に、その命中した彈丸の數は、合計二百四十八發。八月十日の海戰以來、此所に逃け込んで小さく成つて居た、レトウ井ザン、ペレス井ツト、ポベーダ、ポルタワ、バーヤン、バルラダ、ギリヤークの諸艦は云ふまでも無く、運送船アムールまで、さながら射的の的の如く、散々に擊ち碎かれて、皆港内に居据つたまゝ、物の役に立たなく成つてしまひました。

所がゼバストホリー斗りは、まだ機關を破られなかつたと見えて、港内に居たゝまれず、果は九日の朝霧に紛れ、

水雷襲撃

港外さして脱け出しますと、此所には聯合艦隊が、兼てより嚴重に封鎖し、一艘でも出て來たら、目に物見せてくれるぞと、待ち構へて居た所ですから、忽ち水雷艇隊を以て、十二日より十五日まで、續けさまに襲撃し、とう〳〵饅頭山の下に、これを撃沈してしまひました。

饅頭山

それから月の中旬までは、また休戰に成りまして、互ひに戰場の死體を形付け、この埋葬や、又傷兵の手當やらで、時日を費して居りましたが、十八日の午後二時十五分、攻圍軍の一部は、東鷄冠山北砲臺の胸壁を、爆藥を以て撃ち破り、此處から一時に突撃しますのに、敵は機關砲と投爆彈とで、一生懸命に防ぎますので、思ふ様に乗り込めません。

十八日

鮫島中將
重雄
竹内少將
正策

土屋中將
負傷

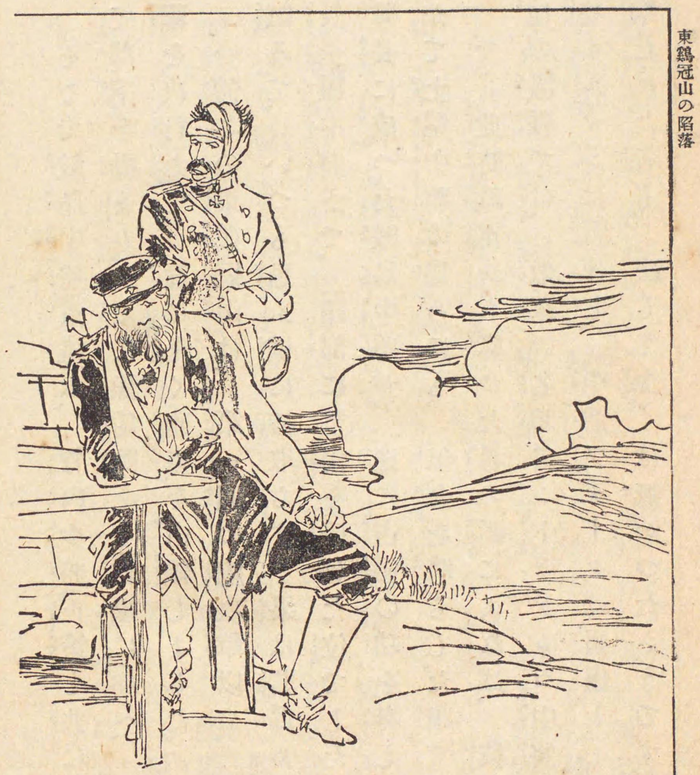
敵將アンドラテンコ戰死

そこで鮫島中將(重雄)は、竹内少將(正策)と共に自ら突進して部下を勵まし、更に豫備隊をも戰線に加へ、最後の大突撃を決行して、遂に全く砲臺を占領しました。

一體この東鷄冠山は、第一回の總攻撃以來、屢々强襲を試みて、いつも思ふ様に捗取らず、果は其爲めに、左翼隊長土屋中將まで、頭部に重傷を受けた位でしたが、代つて隊長に成つた鮫島中將が、遂に占領の功を奏したのは、やがて土屋中將の爲めにも。無念を晴らした事であります。

で、此時敵軍から降つた者の話によれば、彼の二百三高地の激戰では、敵軍の名將アンドラテンコ中將を初め、少將イルマンは戰死し、中將フオークは負傷し、其他將校の撃たれた者も、決して少くは無かつたさうです。

敵將の窮狀



東鶴冠山の陷落

第十一章

旅順の開城

二十八日二龍山

三十一日松樹山

第十二章　旅順の開城

さても旅順の攻圍軍が、第一回から第四回まで、壯烈を極め辛苦を盡した、攻撃の作業の間に、三十七年の冬も暮れて、新たなる三十八年の春は、はや目前に迫つて來ました。

時はその歳暮の二十八日。二龍山の砲臺は、其正面の胸壁を、例の爆藥に依て打破られ、其日の中に我手に落ちましたが、越えて三日、即ち三十一日の朝から、松樹山の攻撃は初まり、難無く其胸壁を爆發させて、砲臺内へ突撃しますと、敵は我兵を鏖殺にする心算で、兼て内部に仕掛けて置いた、地雷火を破裂させましたが。すると此時吹き上

敵土砂に埋まる

盤龍山

スミルノフ、フォーク、ロウキルスレロウ、ロスチンスキー

げた土砂は、却つて敵の退路を塞ぎ、其身をも土中に埋めつてしまひました。

これで松樹山も陷落しますと、引續いて盤龍山東砲臺も乘取り、やがて望臺の敵壘も、明くれば三十八年一月一日を以て、めでたく我軍が占領してしまつたのです。

此等は直接の突撃でありますが、さなきだに此四五日以來、例の重砲の猛力を以て、砲臺と云はず、市街と云はず、隙間も無く砲撃しましたから、今は敵將ステツセルも、なまじ頑強に抵抗して、此地を散々に踏み荒され、士卒を此上失ふのは、人情の忍びない所だと、流石に我慢の角を折り、スミルノフ、フォーク、ロウ井ルレン、ロスチンスキーの諸將と、最後の會議を開いた揚句、遂に軍使を我が軍に

開城降伏の申入

送つて、開城降伏を申入れました。それは元日の夜の事でした。

もとよりさこそと待構へて居た、わが乃木司令官は、直ちに此事を電信に附して、大元帥陛下に申上げますと、仁慈に富ませ給ふわが大元帥陛下は、折返し勅を下だし給ひ、乃木大將の功勞を、十分御賞美あると同時に、敵將ステツセルが、殆んど一年足らずの間、よく籠城の苦節を守つた、忠義の程を嘉し給ひ、敵ながらも感心だと云ふので、今度の開城に付いては、ステツセルを優待して、その武士の名譽を保たしめる樣にと、寛仁大度を極めた、世にも難有い御沙汰でありました。

大元帥陛下の御寛大

そこで次の二日には、双方の委員が出て、水師營に開城

正月二日

開戰後三百二十四日目

の談判を開き、互ひに調印を濟ませますと、三日四日の兩日の中には、此の旅順の要塞を初め、軍港に於ける一切の物は、皆日本の物に成つたのであります。

去年二月十一日、宣戰の詔勅が出ましてから、三百二十四日目、即ち一月の二日を以て、旅順は我手に落ちました。

旅順は我手に落ちました。

少年日露戰史第十一編完

第十二編　奉天の巻（上）

第十三編　奉天の巻（下）

附錄

軍國讀本

卷の十一

嚴谷小波編

一　旅順陷落の歌

（一）

石の扉も　人の手に、
碎かば何どか　破れざらん。
鐵の柱も　人の手に、
挫がば何どか　折れざらん。
萬噸の　艦！　巨彈の　砲！
死力盡して。　敵こそ防げ。

我に兵あり、天下の萃！
水火を恐れず、攻め立つる。
見よ、見よ、見よ！
藻屑と沈む、軍艦何隻！
落花と散るや、砲臺幾所！
旅順は遂に陷落す。
旅順は遂に陷落す。

（二）

石の扉も人の手に、
碎かば何どか破れざらん。
鐵の柱も人の手に、
挫がば何どか折れざらん。

百丈の壘！千尺の寨！
十重に廿重に、敵こそ守れ。
我に策あり、屍を楯！
突貫劇しく、攻めかくる。
見よ、見よ、見よ！
手足は飛びぬ、碧血滾々！
五體は散りぬ、肉片寸斷！
旅順は遂に陷落す。
旅順は遂に陷落す。

（三）

石の扉も人の手に、
碎かば何どか破れざらん。

鐵の柱も　人の手に、
挫がば何どか　折れざらん。
天然の險、人工の牢、
難攻不落と、敵こそ恃め。
我に將あり、東郷乃木！
海陸一致に、攻め寄する。
見よ、見よ、見よ！
白旗は立てり、敵帥降伏！
批準は成れり、開城規約！
旅順は遂に陷落す。
旅順は遂に陷落す。

乃木攻圍軍司令官

兄、勝典
弟、保典

二　乃木攻圍軍司令官

旅順攻略の大功は、攻圍軍司令官、大將乃木希典と、聯合艦隊司令長官、大將東郷平八郎と、この二人に謝せねばならぬ事は、今更云ふまでもありません。

中にも乃木大將は、今度出征の命を受けて、本國を出發しやうと云ふ時、已に非常な覺悟を持ち、又この大任を果たすまでには、二人より無い大切の息子を、二人共犧牲に供したのであります。

一體大將には、勝典と保典と、二人の息子がありましたが、共に陸軍少尉と成つて、今度の事に與かつて居りましたが、而も兄の勝典は、南山の攻擊の時、已に名譽の戰死

を遂げたので、この時はまだ大將は、出發前でありました。

ですからこの母なる夫人は、父なる大將に向ひまして、

『勝典の葬式は如何樣に取計ひませうか？』

と、念の爲に聞きましたら、大將は冷に答へて、

『葬式は暫時待て！　まだ保典が殘つて居る。それに乃公も是から出るのぢや。今に親子三人の骨が揃つたら、其時一度に葬るがよい。そして財産は、皆　天皇陛下へ御返し申し、この家などは燒き棄てゝ、お前も一所に死ぬがよからう。』

と、平氣で云ひ棄て、まだ時刻も來ないのに、はや自分の家を出て、一夜を陸軍大學校に明かし、露營の稽古をするのぢやと云つて、テーブルの上にごろ寢をして、其翌日の

日露兩帥の對面

乃木攻圍軍司令官

露營の稽古

水師營司令部の會見

出發の時刻には、此處から直ぐに立つたと云ひます。

然るに大將出征の後、又もや次男の保典が、二百三高地の激戰で、同じく戰死してしまひましたが、元より覺悟の事ですから、大將は少しも嘆かず、

『待て〳〵！　今度は乃公の番ぢや。親子三人手を引きながら、三途の川を徒渉して行つたら、閻魔もさぞ喜ぶぢやらう。』

と、こんな冗談を云つて居る位です。

されば旅順開城の後、水師營の司令部で、敵と味方の兩大將が、初て一室に會見し、親しく中食を共にしました時、敵將ステツセルは、今度の攻圍戰の間に、乃木大將はその息子を、二人まで失つたと聞きまして、流石に涙を浮べ、

武士の本懷

ステツセルの感嘆

丁寧に悔みの言葉を陳べますと、大將は頭を振つて、

『イヤ、決して悔む事はありません。我子が一人ならず二人まで、國家の爲めに戰死したと云ふのは、人の父として、また一國の武士としても、實に本懷の至であります。我輩は二人の伜を失つた事を、却つて家の名譽として、大いに喜んで居るのです。』

と、立派に云ひましたらば、ステツセルも點頭いて、

『オヽ、よく云はれた。全く武士の名譽であります。實にこの武士的精神あつてこそ、日本軍はあの通り强いのです。わが堅牢無双の要塞の、遂に陷落したのも無理はありません。』

と、大いに感心して居りました。

まことにステセツルの言葉の通り、この精神あればこそ、全く旅順の堅壘をも、遂に攻畧し得たのであります。鬼神を挫ぐ猛將、山河を覆へす豪傑とは、正に大將の如き人を云ふのでありませう。

然るにこの猛將は、一面風流の詩人であります。見たまへ左の二首の詩は、共に旅順攻圍中の作です。

旅順攻圍中の作

其一

山川草木轉荒涼。　十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。　金州城外立斜陽。

其二

爾靈山險豈難攀。　男子誠衷耐百艱。
鐵血覆山山骨露。　萬人齊仰爾靈山。

前のは初めて戰地に渡つて、戰後の金州城を見た時の作、後のは二百三高地占領の後、遙かにこれを望んでの詩であります。

義家、曹操に優る

昔八幡太郎義家は、勿來の關の落花を見て、一首の和歌を咏じ、また魏の曹操は、赤壁の船に明月を賞して、四言の詩を賦したと云つて、共に軍中の佳話として傳へられます。が、乃木大將に至つては、その武勇に於ても、功勞に於ても、義家、曹操に優るものです。隨つてこの二首の詩は、永く日本國民の口に吟じられて、決して斷える事はありますまい。

惜哉松村將軍

三　惜哉松村將軍

勇猛鬼神を欺く、乃木大將を頭に戴いた、第三軍の諸將には、何れも一騎當千と云ふべき、驍將勇士の顏揃ひでありました。

中にも右翼縱隊に長として、二百三高地に、松樹山に、壯烈無比の激戰を試み、拔群の功勞を現はしたのは、先に伏見宮殿下御凱旋の後、少將から中將に昇り、代つて第一師團の長と成つた、松村務本其人であります。

中將は先に第二軍に屬して、南山の敵壘を攻擊した時、旅團長の身として、而も部下を勵まさんが爲に、眞先に軍刀を閃かし、露軍の中へ躍り込んで、ある將校と渡り合ひ、遂にその首を刎ね落して、悠々と引揚げたと云ふ、非常な勇士でありましたが、惜哉！斯程の勇士も病氣には勝たれ

手づから露將を斬る

ず、旅順占領の後、轉じて滿洲の野に進んで行く途中で、腦溢血と云ふ急病の爲めに、空しく斃れてしまひました。

將軍は加賀の人で、舊金澤の藩士でありました。子供の時から大志を抱き、國に許り引籠つて居ては、所詮豪い者に成れないと思ひ、果は父の家を脫け出して、三都の間を流浪し、種々の辛苦をしましたが、やがて王政維新の際、まだ十六の身で、大西鄕の旗下に付き、斥候の役をつとめて、大いに功名を立てた事もあります。

其後十年の西南の役には、野津大將に目を着けられ、大尉に拔擢されましたが、田原坂の激戰には、左の腕に彈を受け、夥しく出血しますのに、自分は平氣で手當さへせず、益々奮擊突戰して、遂に敵を破つてしまひました。

腦溢血

金澤藩士

大西鄕の旗下

敵將の悔狀

海陸の一致

實に松村將軍の如きは、帝國軍人の手本として、永く敬慕すべき人であります。然るに出征の半途に於て、徒らに病魔の犧牲と成り、忽然として斃れましたのは、殘念とも遺憾とも、實に言葉を知らぬ位であります。

されば敵將フオーク中將の如きも、將軍の武勇には、豫て畏服して居たと見えまして、丁度此時は、俘虜として名古屋に居りましたが、將軍の死を聞きますと、大いに之を悼み、わざ〳〵その遺族の處へ、悔狀を送つたと云ふ事です。將軍地下にこれを聞いて、恐らくは微笑を禁じ得なかつたでせう。

四　海陸の一致

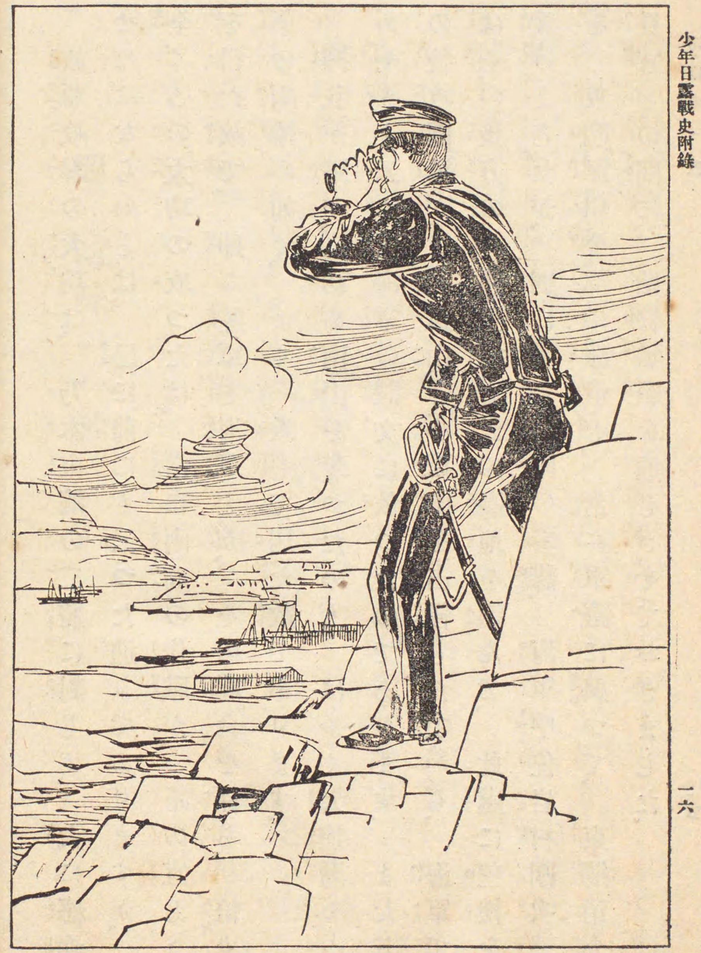
龍王塘の望樓

參謀中佐岩村團次郎

旅順攻略の大功は、乃木東鄉の二將に對して、大に感謝せねばならぬとは、已に前にも云つた通りでありますが、全くこの大功の成つたは、常に兩將の作戰が、その宜しきを得た故で。即ち陸軍と海軍とが、その聯合を保ち、恰も車の兩輪の如く、よく一致して居た故であります。

抑我が軍が、初め南山を奪つたのも、はやく大連灣を占めやうと云ふ、海軍の註文に依つたのであります。また其の後攻圍軍が、大孤山、小孤山を占領した頃から、海軍ではその後方の、龍王塘と云ふ高地を選んで、此處に望樓を設けましたが、別に聯合艦隊の參謀、海軍中佐岩村團次郎を、攻圍軍司令部に派遣し、常に軍議に與つて、東鄉司令長官との間に、始終氣脈を通じさせておきました。

海軍將校の觀測



少年日露戰史附錄

其後九月二十日と成つて、攻圍軍が海鼠山を占頭してからは、直ちに望樓をこれに移しましたが、龍王塘と云ひ海鼠山と云ひ、共に旅順の港内を見るには、屈竟な位地にあるのですから、此處の望樓で見た事は、一々無線電話を以て、軍司令部は云ふまでも無く、艦隊の旗艦へ傳へられるので、其の作戰に利益のあつた事は、實に大なるものであつたのです。

が、この海鼠山からでは、白玉山が邪魔に成つて、まだ十分見えない處があります。

そこで海軍の都合を云へば、是非二百三高地を、一日も早く取らねば成りませんから、これを陸軍に謀りますと、陸軍は快くその訴を容れて、非常な困難を侵し、莫大な損

望樓の効力

害を顧みず、遂にこの山を奪ひましたので、海軍は大いにこれを喜び、直ちにこれに望樓を移して、此處から港内殘る隈無く見渡し、作戰着々歩を進めて、さては遂にこの要地を、全く占領するに至つたのであります。

これを思へば、今度の攻圍軍の勝利には、この望樓の効力が、どれ程あつたか知れません。が、その効力のあつた丈、また危險も多かつたので。元より敵がよく見える丈、敵からも亦よく見られ、迂濶すれば狙撃をうけて、觀測の大役を妨げられますから、容易に身動きも出來ません。

中川少尉文一

其恐ろしい危險を冒し、其苦しい地位に立つて、よくその任を全うしたのは、實に中川文一と云ふ、海軍少尉でありました。沈勇よく大任を全うした、年少勇士中川少尉の名は、乃木東郷兩將の間に、尚其香を放つものであります。

大島將軍の仁俠

敵陣から石文

ペートル大尉の手紙

五　大島將軍の仁俠

第九師團長大島久直は、剛氣にして而も磊落に、其上同情に富んだ、實に敬慕すべき老將軍であります。

旅順の攻圍も大いに歩を進め、今は敵壘と我が陣地と、互ひに手の屆く位に、近く相接した頃の事でした。

或る日敵の陣地から、小さな紙包が飛んで來ました。我兵は拾つてこれを明けて見ますと、中には露西亞の金が十ルーブルと、手紙が一通入つて居りましたが、その手紙には、二等大尉ペートルと云ふ者の名で、『自分の國許には。老母が一人病氣で臥て居るが、此方か

國許の老母

ら久しく音信をせぬので、定めし案じて居る事であらう。然るにこの通り攻圍されて、通信の道が全く斷えてしまつたから、まことにお手數恐入るが、自分の今まで無事で居る事を、何卒母の所まで知らせくれ。即ち電報料として、持合せの金十ルーブルを送る、仁俠なる日本軍司令官閣下、何卒此願を聞屆け給へ！』

十七圓の不足

と、かう云ふ意味が書いてありました。

すると大島師團長は、この手紙を見て感心し、直ぐこれを電報に打たせました所が、その手數料が二十七圓掛るので、つまり十七圓斗り不足に成つたのです。

けれども大島師團長は、彼の大尉の孝心にめんじて、此位は此方で引受けてやれと、快くその不足を立て替へてやり、やがてまた此事を、書面に書いて石に結びつけ、敵陣目がけて投げ込ませましたら、大尉は大層喜んで、『師團長閣下の御親切は、實にお禮の申上げ樣も御座りません。然しこの電報を受取つた、國許の母の喜びと、また御書面を拜見した、私の感喜の情とは、恐らく御推量の外で御座りませう。』と、心底から感謝の意を表はした、丁寧な返事を寄越しました。

二度目の石文

所が五六日經ちますと、同じ樣に小石をつけた手紙が、敵から舞ひ込んで來ましたので、それを明けて見ましたら、今度は日本の紙幣十圓と、同じペートル大尉の手紙がありますので、さては立替を返へしに來たのか、正直な奴だと云ひながら、其手紙を讀んで見ますと、

師團長の賞賛

『此金は、此頃我陣へ斬り込んで來て、天晴れ目覺ましい戰死を遂げた、日本兵の持つて居た物である。死骸は此方で手厚く葬つたが、金は其方へ御返申すから、何卒追悼の費用にして貰ひ度い。尚先日お立替への金は、何分持合せの無い今日の有樣故、今少々待つて吳れる樣に！』

と、かう云ふ事が書いてありますので、師團長は案を拍つて、

『イヤ、實に可愛い奴ぢが！露兵に似合はん正直な奴ぢや。今に旅順は踏み破つても、此奴斗りは助けてやり度いものぢや。』

と、大層賞めて居りました。

さて、此後旅順が陷落して、我が兵がこれに乘り込みました時、大島師團のある軍醫が、敵の病院へ見舞に行きましたら、繃帶をした一人の將校が、寢床から身を起して、

敵將校の感泣

さも嬉しさうに軍醫に取りつき、やがて聲をあげて泣き出しました。その人を糺して見ましたら、是こそ先に電報を賴んで、大いに師團長の德に感じて居た、彼のペートル大尉であつたさうです。

竹筒爆藥の發明

六　竹筒爆藥の發明

工兵戰

第三軍が正攻法を取る事に成つてからは、工兵隊の苦心と云ふものは、實に筆紙にも盡されぬので、旅順の戰爭は、全く工兵戰であつたと云つても、强ち無理では無い位であ

特種の鐵條網

彼の稻妻形の攻路を掘ること、砲臺の胸壁を爆發させる事、乃至爆烈彈を投返む事など、何れも工兵の仕事でありますが、これより先に、敵の砲壘の外部に設けてある、鐵條網を破る事に、非常な勞苦を嘗めました。

鐵條網と云ふ奴は、今まで南山にも大石橋にも、また遼陽攻擊の時にも、酷く我軍を窘めたものですが、殊に旅順の鐵條網には、恐るべき電氣が通じて居て、只に突擊の路を遮る斗りで無く、これを切らうとして斧を當てれば、直ぐこれから電氣を感じて、人が動けなく成つてしまふと云ふ、危險極まるものであります。

されば我が軍の得意の突貫も、之が爲めに挫折して、而も其都度非常な損害を受けますから、何とかしてこの鐵條

竹筒の爆藥

竹筒爆藥の發明

工兵中佐蘆原正勝

竹は不導體

を、首尾好く破る工夫はあるまいかと、苦心に苦心を重ねた揚句、遂に妙案を發明して、見事これを破壞し、わが攻圍軍の作戰上に、偉大の功績を殘した人があります。

その人は工兵の中佐で、蘆原正勝と云ふ人でありましたが、何でも電氣の通じない樣に、不導體の物を用ゐるが一番と、漸く思ひつきましたのは、竹の筒でありました。

一体竹と云ふものは、電氣の通はない事に於て、一番好いものでありますから、即ちこの筒の中へ、爆發を仕込んで行くならば、電氣に打たれる事は無いと、此所に氣の付くや否、早速部下を勵まして、竹筒に爆烈藥を仕掛け、各自にこれを持たせて、錢條網を破らせました所、果して此策功を奏して、さしも堅牢に張りつめて、その上危險な仕

壯烈の最期

吉田中尉の戰死

于天山盤龍山

掛のあつた、彼の恐るべき鐵條網は、物の見事に破られてしまひました。

實に蘆原中佐の發明は、僅か竹筒一本で、千人力を與へた程の、非常の功勞でありました。然るにこの大功勞者は、其後間も無く戰線に於て、敵彈の爲めにその身を碎かれ、壯烈な最期を遂げたのであります。

が、よしその身は碎かれても、その發明は永く殘つて、其後砲壘を碎いた事は、實に幾ケ所だか解りません。

七　吉田中尉の戰死

于大山に、盤龍山に、將たクロパトキン砲臺に、至る所に勇戰して、前後二度まで負傷しながら、勇氣は更に屈す

吉田盛三郎

二龍山攻撃

る事無く、少しでも傷が癒えれば、直ぐに戰線に躍り出て、鬼神を欺く働きに、敵の肝を寒からせ、味方の鼻を高からしめた、勇烈無双の若武者、歩兵中尉吉田盛三郎は、其後十月二十六日、二龍山攻撃の際、嗚呼武運拙くも、遂に戰場の花と散りました。

抑も二龍山の砲臺は、數ある旅順の敵壘の中でも、最も堅牢と歌はれた所です。されば此日の戰にも、此方面に向つた第九師團は、屈強の勇將強卒を拔いて、その突撃の任に當らせましたが、吉田少尉は初め豫備隊に屬して、突撃隊の進むにつれて、勢鋭く斜堤に乘り込み、殘る敵兵を追ひ拂つて、此所を占領したのであります。

然るに其夜の午前三時頃、四五百名の敵兵は、手に〳〵

荻野中隊長代理

戰友の仇

爆藥を投げながら、猛烈に逆襲して來ました。

元より待ち構へて居た吉田中尉は、それッと云ふより陣頭に躍り出で、頻りに部下を勵まして、敵を撃退に掛つたのです。

其時中隊長代理をして居た荻野中尉は、軍刀を打振りながら、逃げ行く敵を追つかけて、二三米突の所まで來ますと、忽ち爆藥に當たりまして、無殘にも其場へ倒れました。

これを後で見て居る吉田は、何でう默つて居られませう。

『おのれ生意氣な露助奴が！戰友の仇其所動くな！』

と、軍刀稻妻の如く閃かして、阿修羅の荒れたる有樣に、敵の中へ躍り込まうとする時、何處から來たか一發の彈が、その顳顬を貫いたと思ふと、中尉は『殘念！』と叫んだま

ま、其塲に名譽の戰死を遂げたのです。

一體此日の戰には、風が強く吹き荒み、而も味方は風下に立つて、土砂を浴び、砲烟を冠り、前が少しも見えない位なので、この防戰の困難は、實に容易な事ではありません。

中隊過半戰死

其中によく踏み止まつて、中隊の過半は死傷しながら、尙屈せず戰つて、遂に敵を擊退した働には、誰も感ぜぬ者はありませんでしたが、これと同時に中尉の戰死を、誰も惜まぬ者はありませんでした。

宇和島の人二十五歳

中尉は伊豫國宇和嶋の人で、出生は明治十三年。されば こそ戰死の時は、僅に二十五歳であつたのです。

年少氣鋭の若武者として、初めて戰地に臨んだからは、

大膽なる水雷襲擊

些少の武功をも人に語つて、これを誇り度いのが常であります。然るに吉田中尉の如きは、出征中度々書狀を認めて、鄕里に安否を報ずる事はあつても、自分の戰塲の働きに付ては、只の一言も書かなかつたと云ひます。その心の奥床しさ、この一事を以てしても、その人物が推し量られるではありませんか。

八　大膽なる水雷襲擊

我が猛烈なる重砲の、間接射擊に眠を破られ、今は港内に居たゝまれなく成つて、苦し紛れに表へ飛び出した、敵の巡洋艦セバストポリーは、我が海軍に思ひの他手數を掛けました。

元より高が一隻と雖も、兎も角も一等巡洋艦である以上は、その儘棄てゝ置く譯に行きません。

十二月十二、三、四五日

其所で東郷司令長官は、水雷艇隊に命じまして、十二月の十二日から、十三、十四、十五日と、四日の間續けさまに、猛烈な襲撃をさせまして、漸くこれを撃ち沈めましたが、それまでには非常な苦心を經、また少からぬ損害を受けたのです。

永田大尉行方不明

中にも十四日の襲撃の時には、非常な大雪でありまして、その爲めに航路を誤まり、永田大尉の乘つて居た、一隻の水雷艇の如きは、遂に行方不明に成りました。

この永田大尉と云ふのは、先に第三回閉塞隊の時、江戸丸に乘て出て、高柳指揮官戰死の後は、代つて爆沈の大任

江戸丸の勇士

を果たした、勇士永田武次郎の事であります。

城頭山下に撃沈

そこで十五日の夜には、最も猛烈な襲撃をしましたが、此時は大いに功を奏して、遂に死太いゼバストポリーをして、その戰鬪力は云ふに及ばず、航海力までも失つて、城頭山下に撃沈してしまひましたが、之が爲めに我が海軍にも、將卒は死傷し、艇隊は損害を受けました。

少佐江副武靖

中にも當時司令を務めて居た、少佐江副武靖の如きは、その艇を修理して居たので、少し後れて襲撃に出ましたが、風波の爲めに水雷の、思ふ樣に發射の出來ぬを、無二無三に進んで行つて、敵艦の間際まで乘り込み、而も其場に艇を止めて、狙ひすまして發射しましたから、その水雷は見事中つて、正しく敵艦を仕留めましたが、其代り少佐の身

最後攻撃の勇士

體も、忽ち敵彈の的に成つて、其場に壯烈な戰死を遂げたのです。

一体水雷艇と云ふものは、その速力を利用して、矢の如く敵艦に近づき、一發水雷を發射するが早いか、直ぐまた飛んで歸るのが、その襲撃の常であります。

それを江副少佐は、わざと敵艦に接近して、其場に艇を止めたまゝ、狙ひすまして射撃するとは、實に大膽極まるではありませんか。

日本海軍の武勇を說き、彼の閉塞隊の壯烈を說くものは、また旅順最後の攻撃に、決死の勇士江副少佐ある事を、また忘れては成りません。

江副少佐の大膽

少年日露戰史附錄

附錄 軍國讀本卷の十一 完

明治卅八年五月十八日印刷
明治卅八年五月廿二日發行

旅順の卷
定價金拾貳錢

著者 巖谷季雄
東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

不許複製

小波
巖谷季雄君著

少年日露戰史

附軍國讀本

洋裝背クロース
大判
毎編百有餘頁

▲正價一冊金拾貳錢　六冊前金六拾七錢　郵稅一冊四錢

少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。附錄軍國讀本は、日露戰爭に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

▲第一編　開戰の卷

△挿　畫……古洞君畫

戰爭の起因
三國の干涉
露國の無法
西亞は何なる國
文明と野蠻の戰爭
艦隊の出發
國民皆兵
新艦の到着
仁川の勝利
旅順の攻擊
宣戰の詔勅
閉塞の成功

附錄軍國讀本
●葉山の御夢　●東洋の子ルソン　●三殿下の勇戰　●敵前の尺八　●殘る事　●初瀨の初花　●軍歌　●旅順の海戰　●下瀨火藥の

▲第二編　決死隊の卷

△挿　畫……年方君畫

日韓の條約
閉塞の計畫
第二回の閉塞
閉塞の成功
マカロフの戰死
決死隊の出發
江上の大砲戰
決死隊の行動
金州丸の苦心
驅逐艦隊の激戰
騎兵の困難
九連城の總攻擊
間接射擊
捕虜の厚遇
露艦の亂暴
鳳凰城の占領

附錄軍國讀本
●決死隊の歌　●勇士の滕枕　●機關兵の沈勇　●軍神の歌　●水割の勇士　●大切な軍艦旗　●子供好きの中尉　●斥候の犧牲

▲第三編　九連城の卷

△挿　畫……金秋君畫

鴨綠江の地理
蛤蟆塘の激戰
海軍の應援
敵兵の同志討
架橋の掩護
諸兵の苦心
九連城の總攻擊
捕虜の厚遇
鳳凰城の占領

附錄軍國讀本
●黑木大將　●牧澤中尉の苦戰　●九連城は占得　●武士の情　●大膽なる斥候將校　●裸體の武士　●志士の不運　●戰場物語

▲第四編　南山の卷

△挿　畫……洗鱗君畫

第三回の閉塞
閉塞の成效
上陸の困難
南山の大激戰
南山の占領
第二軍の名將
普蘭店鐵道の破壞
青泥窪占領の奇功
大戰前の小衝突
大連灣の掃海
金州の占領
嗚呼吉野、初瀨

附錄軍國讀本
●南山攻擊　●伏見宮殿下の御武德　●鳥海艦長　●勇猛士官　●宮本武藏の末孫　●友愛の嬉涙　●決死の志願

▲第五編　得利寺の卷

△挿　畫……國觀君畫

龍王廟の騎兵戰
得利寺の激戰
中央隊の戰況
左翼隊の戰況
右翼隊の戰況
戰爭の結果
常陸丸と佐渡丸
和泉丸と羽後丸
上村艦隊の苦心
第二軍の新行動
恨は深き玄海洋
得利寺とは何所

附錄軍國讀本
●君前の星野少佐　●聯隊旗を燒く　●不運なる上村中將　●敵將士の自殺　●騎兵の奮戰

▲第六編　摩天嶺の卷

△挿　畫……國峰君畫

大孤山上陸軍
摩天嶺の逆襲
巖の占領
二度目の逆襲
嶋馬集の掃清
張家石の激戰
天の行軍
分水嶺の戰鬪
武運强き馬場大佐
橋頭の大戰
滿洲軍總司令官
天と時と人の和

附錄軍國讀本
●第一軍の兩殿下　●大庭少佐の詩　●海門艦長の最後　●滿洲の蠅　●勇猛無比の若武者　●自ら敵陣に餓死す　●兵にも豪傑　●不思議の勇士

▲第七編　大石橋の卷

△挿　畫……竹坡君畫

熊岳城の逆襲
蓋平の占領
營口の占領
大石橋の敵
析木城と海城
砲兵の苦戰
榆樹林子と樣子嶺
右翼隊の大夜襲
ケルレルの戰死
月下の血戰
伊豆沖の敵艦

附錄軍國讀本
●日本人は日本人　●詠詩　●野津大將　●三章　●壯烈　●橫山大尉の戰死　●勇將　●將卒の下に弱卒なし　●剛膽なる井上大尉　●身を捨てゝこそ極樂もあれ　●脇腹に鋸の尖

▲第八編　黃海の卷

△挿　畫……清方君畫

珍しや敵艦の出港
水雷艇隊の夜襲
哨艦攻擊
龍王塘と鮮生角
三驅逐艦の勇戰
待ちに待つた敵艦隊
三笠の勇戰
敵艦隊の敗走
逃走の敵艦
ノウヰックの最期
蔚山沖の海戰
リューリックの擊沈

附錄軍國讀本
●勇壯なる博恭王　●伊知地三笠艦長　●隱れたる司令長官　●上村中將　●博愛　●軍艦名寄の歌　●寺島中尉の組打　●軍艦の說明　●勇士水雷を抱く

▲第九編　遼陽の卷

△挿　畫……年峯君畫

遼陽の敵
激烈なる追擊戰
三軍の連絡
野津軍の戰況
黑木軍の右縱隊
奧軍の活動
太子河左岸の占領
首山堡の苦戰
太子河右岸の激戰
悲慘なる閼谷聯隊
名譽の岡崎山
遼陽城の日章旗

附錄軍國讀本
●梨本宮殿下の御仁德　●負傷したる小川中將　●學者將軍　●名譽聯隊の名譽勇士　●池月軍の軍神　●勇烈なる少尉の最期　●死して喇叭卒　●放さぬ武器

▲第十編　沙河の巻

△挿　畫……古洞君畫

敵軍の南下……旅團感情の嘴矢
大會戰前の小衝突　三塊石山の大夜襲
本溪湖隊の苦戰……中央軍の成功
軍旗山の奪闘……左翼軍の進擊
閑院宮殿下の御偉勲……須永部隊の奇拵
右翼軍の左縱隊……沙河の對陣

附錄　軍國讀本
閑院宮殿下軍旅に代る隊長の約束の見舞酒　猛將丸井政亞鳴の呼仁平中佐水郡副官の傳令大尉崎少尉の書翰　大膽なる樹上斥候

井上文學博士作歌　山田源一郎君作曲　征露の歌　正價貳錢五厘　稅八册迄貳錢

文學士大町桂月君作歌　上眞行君作曲　露西亞征伐軍歌　正價參錢五厘　稅三册迄貳錢

大和田建樹君作歌　上眞行君作曲　日露開戰軍歌　正價四錢　稅二册迄貳錢

文學士久保天隨君作歌　上眞行君作曲　征露新軍歌　正價參錢五厘　稅三册迄貳錢

文學士鹽井雨江君作歌　白井規矩郎君作曲　女子軍歌　正價拾錢　稅二册迄貳錢

佐々木信綱君作歌　上眞行君作曲　露西亞征討の歌　正價參錢五厘　稅三册迄貳錢

▲第十一編　旅順の巻

△挿　畫……大羽君畫

旅順の包圍……一巨砲臺の由來
降の軍使……最後の總攻擊
勸降の軍使……決死の白襷隊
第一回總攻擊……嗚呼二百三高地
海鼠山の占領……東鶏冠山の陷落
『ステッセルと……旅順の開城
クロパトキン』
二子山と鉢卷山

附錄　軍國讀本
旅順陷落の歌　惜哉松村軍曹　海陸一致　大島將軍　竹筒爆藥の發明　吉田中尉の軍の仁俠　大膽なる水雷襲擊

野口寧齋君作詩　戰　征露宣戰歌　正價五錢　稅二册迄貳錢

國府犀東君作樂府　伐露　大陸劍歌　正價五錢　稅二册迄貳錢

巖谷小波君作歌　征露軍歌　旅順の海戰　正價貳錢五厘　稅八册迄貳錢

巖谷小波君作歌　征露軍歌　決死隊　正價貳錢五厘　稅八册迄貳錢

山田源一郎君作曲　佐藤六石君作詩　戰　征露大捷歌　正價五錢　稅二册迄貳錢

大和田、佐々木、中郵東宮、四君作歌、上眞行、小出作之助君作曲　日露戰爭　國民唱歌　正價八錢　郵稅貳錢

豫告

第十三編　奉天の巻（上）　黑溝臺の巻

第十三編　奉天の巻（下）

豫告

嚴谷小波君著
（博文館發兌）

明治お伽噺

第一編　お伽十番
第二編　お伽三幅對
第三編　新八犬傳（上）
第四編　新八犬傳（下）
第五編　お伽四天王（上）
第六編　お伽四天王（下）
第七編　新伊蘇普物語
第八編　お伽十二支（上）
第九編　お伽十二支（下）
第十編　お伽洋行船（上）
第十一編　お伽洋行船（下）
第十二編　お伽立志噺

（武内桂舟君畫）

▲全部十二册大判洋裝並綴紙數一册約百廿頁
正價（一册金拾貳錢　六册六拾七錢　十二册壹圓廿八錢）▲郵稅壹册四錢宛

日本お伽噺

第一編　八咫烏米僊畫
第二編　田村將軍年方畫
第三編　玉取半古畫
第四編　源三位月耕畫
第五編　八幡太郎年峯畫
第六編　武藏坊年英畫
第七編　一休和尚華邨畫
第八編　東照宮○○畫
第九編　姨捨山半古畫
第十編　川中島桂舟畫
第十一編　玄武門古洞畫
第十二編　白虎隊周延畫
第十三編　鎮西八郎畫
第十四編　最明寺華邨畫
第十五編　朝比奈畫
第十六編　櫻井驛年方畫
第十七編　草薙劍永興畫
第十八編　日吉丸苦石畫
第十九編　文覺上人半古畫
第二十編　和唐內松亭畫
第廿一編　高千穗華邨畫
第廿二編　鬼童丸永洗畫
第廿三編　熊本城年方畫
第廿四編　宇治川半古畫

▲全部二十四册大判洋裝美本彩色美麗表紙紙數壹册八拾頁以上
正價（一册金六錢　六册前金參拾四錢　十二册前金六拾五錢　全部二十四册前金壹圓貳拾錢）▲郵稅壹册金貳錢宛

巖谷小波君編
著名畫伯挿圖

世界お伽噺

正價（◉壹册金八錢◉六册金四拾五錢◉十二册金八拾五錢◉二十五册金壹圓六拾五錢◉五十册金參圓貳拾錢◉全部百册六圓參拾錢△郵税壹册貳錢

全部百册每編極彩色石版表紙
讀切紙數一册約七十頁

◉第壹編 世界の始 太古 不折君畫
◉第貳編 五色の石 支那 半古君畫
◉第參編 珊瑚島 南洋 年方君畫
◉第四編 魔法博士 獨逸 永洗君畫
◉第五編 無人島大王 英國 審也君畫
◉第六編 鬼婆と少女 露國 不折君畫
◉第七編 法螺人先生 獨逸 古洞君畫
◉第八編 二人王子 露國 象堂君畫
◉第九編 小螺島 英國 年峯君畫
◉第拾編 孫悟空 支那 審也君畫
◉第拾壹編 驢馬姫 佛國 審也君畫
◉第拾貳編 大豫國 英國 年峯君畫
◉第拾參編 人言書 印度 古洞君畫
◉第拾四編 王乘取 土國 金秋君畫
◉第拾五編 城螺生 獨國 清親君畫
◉第拾六編 法先僧 アフリカ 年方君畫
◉第拾七編 猿智慧小 濠洲 耕溪君畫
◉第拾八編 續酉の長征伐郎 洪牙利 月耕君畫
◉第拾九編 鷺の踊 濠洲 審也君畫
◉第貳拾編 光明の姫使 印度 葦舟君畫
◉第廿壹編 鷄の使 アフリカ 華邨君畫
◉第廿貳編 日の車 羅 沖舟君畫
◉第廿參編 三人輪 小亞細亞 古洞君畫
◉第廿四編 白いの鳥 アイノ 月耕君畫
◉第廿五編 消炭の郎 露國 半古君畫
◉第廿六編 十二王妃 羅 葦舟君畫
◉第廿七編 狐のの裁判（上） 獨國 春帆君畫
◉第廿八編 狐の裁判（下） 獨國 金秋君畫
◉第廿九編 奇體の燈臣 亞拉比亞 金秋君畫
◉第參拾編 獵師の洋塔 希臘 不折君畫
◉第參拾壹編 九重の大臣 西亞細亞 古洞君畫
◉第廿貳編 虹橋の王 南アフリカ 葦舟君畫
◉第廿參編 魔法の卵 露國 審也君畫
◉第廿四編 岩の船 アイスランド 年方君畫
◉第廿五編 鐵の子 ハンガリー 桂舟君畫
◉第廿六編 鐵の狼 露國 華邨君畫
◉第廿七編 浮かれの胡弓 瑞典諾威 金秋君畫
◉第廿八編 夢の三郎 洪牙利 月耕君畫
◉第廿九編 豆の王 瑞典諾威 古洞君畫
◉第廿八編 三つの難題 氷洲 不折君畫
◉第四拾編 德利の長者 愛蘭土 大羽君畫
◉第四拾一編 梨の殿様 ミニリヤ島 月耕君畫
◉第四拾二編 黑足の小僧 希臘 春帆君畫
◉第四拾三編 黃金の船 フインランド 審也君畫
◉第四拾四編 幸福の花 トランスバール 古洞君畫
◉第四拾五編 大洪水 シベリヤ 葦舟君畫
◉第四拾六編 刀の三本 デンマーク 金秋君畫
◉第四拾七編 石行方 朝鮮 半古君畫
◉第四拾八編 手の女姫 トランスバール 年峯君畫
◉第四拾九編 啞無し王 デンマーク 沖舟君畫
◉第五拾編 骸の骨髮 北亞米利加 春帆君畫
◉第五拾一編 三筋の金島 南亞弗利加 蕉亭君畫
◉第五拾二編 鬼の名 獨逸 審也君畫
◉第五拾三編 魔校 デンマルク 金秋君畫
◉第五拾四編 鶯子 シシリヤ 清方君畫
◉第五拾五編 朝星 ルーマニヤ 春帆君畫
◉第五拾六編 法螺の星 佛國 沖舟君畫
◉第五拾七編 指環の夕 露國 洗鱗君畫
◉第五拾八編 二子の王 ルーマニヤ 蕉亭君畫
◉第五拾九編 鬼の魔 羅 葦舟君畫
◉第六拾編 二人力 獨逸 沖舟君畫
◉第六拾一編 病の馬 露國 米齋君畫
◉第六拾二編 金馬 希臘 洗鱗君畫
◉第六拾三編 熊の將 シベリヤ 大羽君畫
◉第六拾四編 龍宮の娘 琉球 古崖君畫
◉第六拾五編 森の使 印度 年峰君畫
◉第六拾六編 日かの女 北アメリカ 春帆君畫
◉第六拾七編 うの罰 愛蘭土 春汀君畫
◉第六拾八編 光水笛 デンマルク 勃彦君畫
◉第六拾九編 活の死 愛蘭土 國峯君畫
◉第七拾編 木兎の剣 獨逸 沖舟君畫
◉第七拾一編 少年の水 瑞典 蕉亭君畫
◉第七拾二編 小の國 獨逸 春帆君畫
◉第七拾三編 薔薇の助 伊太利 竹舟君畫
◉第七拾四編 地獄の姫 希臘 米齋君畫

廣谷小波氏のお伽噺は一種獨得の妙ありて他人の比準し能はざる所あるは世皆之を知れり而して此世界お伽噺は廣く世界各國に於ける古今の傳説口碑等を參酌して編述せられたるもの今や其七拾餘編を出版するに至り江湖の歡迎亦日に月に加はる自今以後氏が輕妙犀利の筆を以て如何に有益多趣の讀物を公表せらるゝやは、請ふ既往に徵して知られんことを

日本昔噺

正價 ●壹冊金五錢 ●十二冊金五拾貳錢 ●六冊金廿七錢 ●全部廿四冊金壹圓 ●郵税一冊貳錢 宛

嚴谷漣山人著

全部廿四冊目書

●第壹編桃太郎 永洗君畫
●第貳編玉の井 永興君畫
●第參編猿蟹合戰 丹陵君畫
●第四編松山鏡 桂舟君畫
●第五編花咲爺 年方君畫
●第六編大江山 國松君畫
●第七編舌切雀 蕉窓君畫
●第八編俵藤太 華僊君畫
●第九編かち〳〵山 廣業君畫
●第拾編瘤取 敬中君畫
●第拾壹編物臭太郎 牛古君畫
●第拾貳編文福茶釜 華邨君畫
●第拾參編八頭の大蛇 月耕君畫
●第拾四編兎と鰐 松亭君畫
●第拾五編羅生門 年峰君畫
●第拾六編猿と海月 金僊君畫
●第拾七編安達が原 頓音君畫
●第拾八編浦島太郎 秀湖君畫
●第拾九編一寸法師 清親君畫
●第貳拾編金太郎 年英君畫
●第廿壹編雲雀山 玉桂君畫
●第廿貳編猫の草紙 淺井君畫
●第廿參編牛若丸 周延君畫
●第廿四編鼠の嫁入 玉章君畫

女波男波

正價金四拾五錢 郵税八錢

小説の艶に過ぐるを斥く勿れ。個中大寓意あり大諷刺あり。論説の罵に失するを咎む勿れ。這裡大抱負あり大見識あり。若し夫れ附錄の變女大學に至りては變生男子が大氣焰、大の男も三舍を避くべき。蓋し當代の大問題なるべし。嗚呼大なる哉此書や。實に寸珍の美本とす、呵々。

全一冊洋裝袖珍クロース製

笑

口繪 拈華微笑 顔笑 山笑 花笑

正價一冊金四拾錢 郵税金八錢

この書題して笑といふも思出し笑の罪深きにあらず世辭笑の追從も學ばず虎溪三笑の禪味もなければ時平が七笑の惡きもせず畢竟あどけなきニタ〳〵笑ひ、一人よがりの馬鹿笑に過ぎねと、若し夫れ世間の冷笑にあひなば、やがて作者の苦笑ともなるべし、兎角は福の神呼出しの呪、笑ひたまへ讀みたまへと申す

博文館